老舗の町・尾張町シリーズ21

尾張町を支えた女たち その拾

紙よりも重い、お客さんのこころの重さ

目　次

はじめに …… 1

新(あら)所帯は何から何まで …… 2

親爺姑に近所小姑 …… 2

肌で生きる近江町で鍛えられて …… 4

丈夫な店を探していたら、ご近所に能楽師が …… 6

実家のことなど …… 8

尾張町っておもっしい街 …… 9

道の真ん中に仕入れた紙の束を放り出したままに …… 10

昼間は人様へのご奉仕、夜なべこそ本当の仕事 …… 12

浅野川大橋で莫蓙を敷いて夕涼み …… 15

軍隊へ行った内の人の留守を守って …… 17

加賀鳶に縁のあった息子 …… 18

この商売を続けさせてもろうとる喜び …… 22

あとがき …… 25

表紙絵　　石野琇一(宝生流教授嘱託・石川郷土史学会)

はじめに

商いの成り立ちを素朴に見直すと、ここに或るものと、あちらにないものを便利に使えるようにお世話することから始まったのではないでしょうか。“士農工商”という言葉にもあるように、商いは一見すると一番下に位置づけられているようですが、実は社会の発展に伴って一番最後に必要に応じて現れて来たものといえます。

最初は誰もが畑を耕し、獲物を狩る生産者であり、自給自足で満足していた時代は長く続いていました。やがて、徐々に社会の発展に伴って不足しているものを欲しがるようになり出して来ると、それをお世話する人が必要になるものです。

お世話をするには、人と人を結びつけるのですから、こころを持った配慮が自然に生まれて来ます。実際、「大漢和辞典」(諸橋轍次著)を調べると、“商”の字の持つ意味は言の省略した形と、内の字とを合わせて出来たものとされています。それは、「内にあるものを外からはかり知る」ことであり、相手の立場になって思い遣ることに通じていきます。

商いは形の上では物の売り買いですが、そのモノを通じてお客様のこころが伝え合えるように、こころの内をはかり知る所に喜びがあるのではないでしょうか。

まず人様のお役に立つことを思い、少しでも喜んでもらえれば、それが自分の喜びになるもの。自分が自分がといっていては、商売にもなりゃしない。当座は自分の都合やら楽しみは横に置いといて、人様の笑顔をそのまま自分のこころの鏡に写すことに喜びを感じるようになるのが商人。

その由来は、遠く中国の古代王朝である殷の後期の別称“商”の人が、次の周の時代になって全国各地に「モノの売り買い」をする様子を見て、周囲から商の人のするなりわいと言われたことからと聞いています。けれど、これは商の都の人が国を失って流浪した時になって、やっと人と人を繋ぐ重要さに気づき、商人という名前が生まれたものなのでしょう。

今回の紙屋の媼も、それを無心な日々の仕事の中で体得しているようでした。

新(あら)所帯は何から何まで

「分家して十間町の紙問屋で修行している良い人がおる」
ただソンダケデ(それだけで)、畝田で農家をしていた両親から話があったと思う間もなく、仏前結婚をしたことを覚えとる。ちょうど、殿町に初めて放送局(今のＮＨＫ)が出来て、ＪＯＪＫたらいうて初めてラジオの音が出て大騒ぎしてた昭和も５年の頃やった。

本家のオカッツァン(おかみさん)になるのと違うて、分家やさかいあんまり気を使わんですむやろう。それに力仕事のキツイ農家より、商売屋の方が体も楽そうやろう、と考えた親ごころもあったのやろね。実家が何百年も続いた農家で、代々仁左衛門を名乗っていただけに、何かと昔からのシキタリばかりが多かったさかい尚更に。

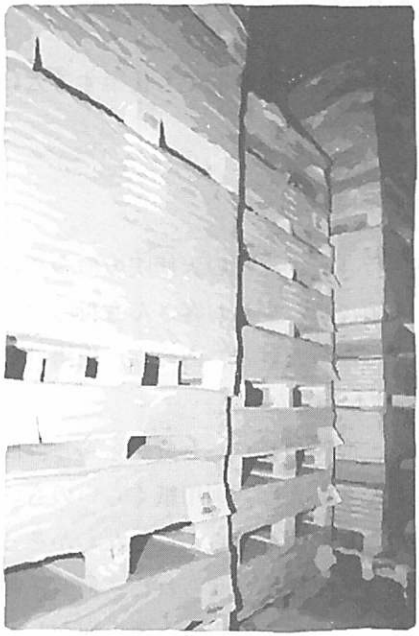
最初から尾張町に店を構えることも出来んかったさかい、まずは修行していた問屋の蔵の横にあった家を借りたんやった。何もかも新しい所帯を持つと言うたら傍目の聞こえはいいけど、二人の周りには何んにもなし。無い無い尽くし。それこそ、箸一本から揃えていかなならん有り様。小さい頃から当たり前のようにして身の周りに揃っていたものが、きれいさっぱり見事に無いのや。目の前に映って来るのは、内の人だけしかおらんし。何やらひとりでにおかしくなってくる。

というて、じっとしている訳にもいかん。世間様も新(あら)所帯やからと、いつまでも甘く見てはくれないし。二人が食べて行くには、精一杯に体を動かして仕事をすることしかない。日中(ひなか)に、内の人が座っていた姿を見掛けたことがないのも、そんな余裕がなかったせいやろ。私も、アセナイ(忙しい)気持ちで家中を走り回り、お互いの顔を見れるのは夜うさりしかなかった気がする。

親爺姑に近所小姑

世の中って、妙なところに釣り合いが取れとるんかしら。新所帯やから姑さんがいない代わりに、回り中の人達が姑になったようなもの。何もそんなに人の家の中のことまで首を突っ込んで来なくてもと思う程、騒々しかった。

内の人は私が、店先で注文した紙の数え方が遅くて、慣れたお客さん自身がさっさと数えて持って行くようなことがあっても、そのうち慣れるもんや。と、あまり喧しくなかったから、親爺姑にはならんかったけど。



近所から、ご飯の炊き方や掃除の仕方、子供の躾けまで口出しされる始末。ソヤサカイ(だから)、私だけで留守番していてお客さんの来ない時間なんかは、玄関の鍵を掛けてしもう。誰も構えないようにしてしまうのや。ネンネ(赤ん坊)を店先で遊ばせ、私は例え風邪をひいていてもハチマキを締めて、掃除やらご飯の用意、そうして仕事の後片付けをする。思いっ切りしたいことをするには、こうするより他にしようがなかったし。

洗濯なんかも、内の人にいらぬ気遣いをさせまいと、まだ寝ている朝の４時か５時の頃に、母衣町から主計町を通って浅野川の河原へ行って済ませて来た。

こんな時間は、さすがの主計町も前の晩の三味線の音色も静まり、ぐっすりと寝込んでいるようやった。

内の人の目につかない所で、女の私が出来ることは何んでもやって来た。でも驚いたのは、そんな時間にはもう尾張町の合羽屋のオカッツァンが、河原へ桐油をひいた紙合羽を干しに来ていることやった。

「おはようさん」

笑顔で挨拶され、ちゃんとどんな時間でも仕事する人はしているんやと、思い知らされた。

肌で生きる近江町に鍛えられて

２年程して高岡町へ行き、小立野の天徳院の横やらに居ったりして、近江町市場の中で店を構える頃には、少しお客さんも付くようになってた。雇いの店員さんも一人いるようになったけど、内の人が出掛けて行った後は、ほとんど私一人で何もかもこなすしかなかった。

農家から来たもんで、商売のイロハも分からんし、商品の紙の区別も出来んかった。私でも分るもんといえば、画用紙くらいのものやった。血の気の多い近江町の人達は、そんな私の慣れとらんことなんかそっちのけで、今言うて今の注文ばっかりして来るので往生させられた。何せ、朝頼まれたものを昼までに持って行かんかったら、それこそ店先へ魚の血がしたたっている出刃包丁を持ったまま、

「なんですぐ持って来んのや！」

と、ガナリつけて来るんやさかい。肝っ玉が小さかったら、どんな風になっていたことやら。

幸いにも、体の丈夫さが取り柄だったもんで、分らなくてもしゃにむに体力で、こっちも威勢良く応対していた。けど、今思い返して見ると、知らんかったからこそ出来たことやったと、背筋が寒うなる。

「パーチメントをすぐ持って来てくれ」

と言われて、パーチメントってどんな紙なんかしら。誰かに聞こうにも、内

の人は外へ出掛けているか昼間の疲れで眠っているし。入ったばかりの店員は、まして何んのことか分る訳はなし。やっとこさい、鯛なんかを並べる時に下に敷く青い紙やと分るのに一苦労も二苦労も。

分ってしまったら、

「まいどあり〜」

と、まるでそんなことは端っから知ってたようにして配達に回ったっけ。それも、朝の早い近江町市場のこと、午前の１時２時のまだ真っ暗な中を小走りに駆けた。せっかく注文してもらったお客さんにご迷惑を掛けたらいかん。お前の店に頼んで良かったと思われるためにも、すぐに持って行かなけりゃ。自分のことよりも、まずお客さんのためになるようにとの思いが先やった。

冬の寒い朝なんか、まだ周り一面が真っ暗で、ぼ〜っと薄白く雪明かりのするのを頼りに、紙を背中に担いでわら草履を履いて行った。背中に感じる紙の重さと、刺すような雪の冷たさで痛くなる足。じっとしていると尚更辛くなるもんで、余分のことに気を回さんと、ただ体を前へ前へと動かすことだけを考えていた。ほんまに実家の親は、どこが分家で気を使わんで済むとか、体を動かすのが田んぼ仕事より楽なもんと思ったのやら。

「お、朝早くにあんやと。ゴキミッツァン(ご苦労さん)。オカッツアンも精出しとるね、また宜しゅう頼んわ」

と、店の人に声を掛けてもらうと、張り詰めていた気が緩むんか、笑顔と一緒に目にちょっと涙が出かかるのを慌てて押さえてみたり。口先は乱暴やけど、性根は皆んな良い人ばかりや。

「あのう、その“半切り”の紙、うちでも扱うてますけど」と、毎日の売れたものの名前と値段を筆で書いている巻紙を目ざとく見つけ、帰りが手ぶらにならんように、忘れんと扱い商品を言えるのになったのも、近江町で鍛えてもらったお蔭や。

そういえば、昼過ぎになると近江町も一段落するんか、キトキト（生き生き）した町の勢いも緩やかになる。

「たァ〜か〜らァをよォすゥるゥ〜<宝をよする>、な〜み〜の〜つ〜づ〜みィ〜

<波の鼓>。ひょォ〜しィをそ〜ろ〜ヱ〜て〜〜<拍子を揃へて>」
と、魚屋の二階付近から謡の声が流れて来る。

丈夫な店を探していたら、ご近所に能楽師が

知らん人から言わせれば、身の程知らずかもしれん。けど、金沢に住んでいると謡をすることが身だしなみの一つみたい。それに、ここでは謡も出来んかったら人様の家へも行けんかったさかい。爪に火を点すようにしてして新所帯の物を揃え、お金を貯めていることと、謡を習うことは一緒のことやった。

内の人なんか、丁稚奉公で修行している頃から、そこの店の旦那さんの横で一緒に習っていた位やさかい、年期が入っている。私も見よう見真似で習い出したのは、少しゆとりが出来て今の場所に来てから。

何回も店を移らないかんかったのも、重い紙に家が持たなかったせい。今度

こそ大丈夫やろうと思って移った店で一仕事して夜うさりに、寝ている枕元にミシッミシッと音が聞こえて来る。すわっ、地震かなっ！と思って起きて見ると、紙の重さで家が悲鳴を上げている声な訳。どこぞの店の時なんか、床が抜けてしまったこともある。また今度も駄目だったかと、丈夫そうな家を探して店を移すんやけど、しっかりした建方の家は家賃も高いし。なかなか手が届かず、いつかは安心して住める店を持つことを夢にしていたもんや。

縁あって今の場所に来て最初にしたことは、紙の重さにも充分耐えられる丈夫な倉庫を作ることやった。親戚の大工さんやからと無理を頼んで、お金の支払いも充分に日延べしてもろうたさかい、それこそちょっとした地震があっても安心出来る仕上げになった。

そうして一段落して店の周りを見回すと、すぐに気心が知れて家に出入りする人が出来て内の人も子供たちも大歓迎で喜んだもんや。最初の内は気の良い

人やというだけで気付かなんだけど、なんとまあ能楽師の先生やったんや。これやさかい、金沢の町らしいがやね。

先生いうてもオジマ(次男坊)で、これから実力を蓄えて一本立ちして行く直前で、格式張ったことより、もうすでに家族の一員のようなお付合いが始まってしもうとるんやもの。出稽古というよりも、気軽に毎日でも顔を出してもろうのが当たり前。

たちまち、私も子供たちも家族皆んなが弟子になり、稽古の後は同じ御膳で食べる程の間柄になってしもうた。今では養子先で立派に独り立ちして金沢能楽界を背負うような大先生になったけど、家に来たら昔と同じように一緒にご飯を食べとる。ほら、ここにあるご飯茶碗や箸がそれやし。端(はた)ではどんなに偉い人と騒がれていても、ここの店に来たら同じご飯茶碗で食べるがになってしもうとる。何んの気がねもない、アタルマエ(当たり前)のお付合いをしとる。気がついたら、一人で寂しそうに食べとることもあったかしら。

何んで皆んな謡やお茶を特別な目で見るんやろね。一度やり出してみたら、別にどうってことない。毎日の生活の中での、気持ちの張りというか気分転換みたいなもんかね。商売は相変わらず厳しくっても、町中へ出て来た味わいを感じるし。

実家のことなど

「嫁いでしもうたら、もうそこの家の人間になりきってしまわなならん。実家がどうのこうのというもんでない。頭から綺麗さっぱり忘れてしもうまっし。だいたいイッショウケンメイと言うのは、“一生懸命”と書くんでのうて“一所懸命”と書くのが本当なんや。嫁いだ先の所を自分の死に場所と思うて懸命に働くことが第一。最初に土地があって、そこで毎日どうして生きて行くか懸命に頑張って来たから、ここの家もお殿さまの時代からずっと続いて来られたんや。そこんところを肝に命じて、間違えんように。」

どうしようもなく苦しい時なんか、タータ(小さい娘)の頃のことを懐かしく思い出したりしたわね。ホヤホヤ(そうやそうや)、母屋の二階に外から見たら分ら

んような部屋があったんや。家のカーカ(母)に聞いたら、昔は前田のお殿さまがこの辺に鷹狩りに来るときに休憩に寄られてたので、その姿をこの部屋からそっと覗いとって、カーカのトート(父)からひどく怒られたとか。

「お殿さまのような偉い人を上から見下してはいかん」

と言われたとか。

ホシタラ(そうしたら)この部屋は何のためにあるんやろ。子供にはそう言っても、誰かがそっと覗いとったんでないやろか。こんなリクツナ(巧みで便利な)部屋は、あんまり誰にでも言わんほうがいいに決まっとるし。

そういえば、尾張町の大通りの大店も、ちょっと見には平屋建で、一階の小屋根の上に小さな明かりとりがついているように見えるけど、中に入ってみるとちゃんとした二階の部屋になっとって、外が見られた。あれも、表向きは参勤交替の行列を上から見下ろしてないというだけのことで、そっと覗いてたんやね。

ま、そんな尾張町の大店と同じような構えをして、身近にお殿さまと縁があるほどの由緒正しい家の娘やったということが、ふっと気持ちを和らげてくれる。

尋常高等小学校の時には皆んなしてサナダ(帽子に巻くシメナワのような紐)を作ったりしてたっけ。箸が転がっても可笑しがるあの頃のことは、何かの拍子にすぐ頭に浮かんで来る。

今思い返してみると、お姉ちゃんがいてくれたお蔭で、私にはアンマシ喧しく家のしきたりを言われんかったみたい。末娘で良かったわ。お姉ちゃん、ごめんね。

尾張町っておもっしい(不思議で魅力ある)街

二人で店を持ったときから、いつかのあの尾張町で商売をしたい！と願わんことはなかった。何ちゅうてもあの前田のお殿様が、尾張名古屋の荒子から身近で信頼出来る人を連れて来て住まわせたという由緒ある街やさかい。商売人にとって“信用”ていう、一番大事な看板を持っとらんと商い出来ん所やし。

とにかく、尾張町に店を構えることさえ出来たら‥‥。後は、雪だるまのように商いが上向きになるはずや。もう、一つの憧れとでもいうたらええのか。

ところが、お客さんへの笑顔と違うて、本当に厳しい街なんやなあと、住んでみてから何かにつけて思い知らされたもんや。眩しそうに見えた大店のオカッツァンにしても、オアンサン(ご主人)を影で支えるために奥では並大抵ではない苦労をしているし。まるで、兼六園の霞ヶ池の白鳥みたいなもんや。水の上ではどんだけ優雅に見えても、水面下の足はどんなに忙しく動いていることか。

もうこれで充分、と安心してしまったら、たちまちどんな大店でも没落してしまう。毎日気を抜かず、“一所懸命”に頑張って体を動かし続け、人様の前ではその苦労をおくびにも出さない。

そやさかい、尾張町のオカッツァンは皆んな生き生きしている。顔色もいいし、第一に目が輝いている。自分のしていることに悔いのない自信を持っているんやろね。私も負けてたまるかいね。

尾張町の紙を商う店として、

「何んや、あそこの店は。尾張町で商売する甲斐性があるんかいね」

なんて、後ろ指を指されたくないし。

見回したら、荒子の昔からの店は一握りやけど、今在る店は皆んな筋金入りや。切磋琢磨している緊張感が伝わって来るみたい。だらだらとしたことのない、小気味よさはひょっとしたら私にとって水が合うみたい。

道の真ん中に仕入れた紙の束を放り出したままに

昼、私らが出払っている頃に、運送店が荷馬車に積んだ品物を配達して来る。紙の重さが半端でないもんで、店の中へまで運び込まんと、道の真ん中にドシンッと放り落として行くんや。隣近所からは、その音が地響きとなってやかましいと言われるけど、こっちも気が気でないのや。

早う店へ戻らんと、きっと今ごろは荷物で道を塞いでいるやろうし。なんぼ、今と違うて車の通りが少ないというても、人様にご迷惑を掛けているのは間違いのないことやし。あくせくした思いでやっと店に帰り着くのは、夜うさりに

なってから。

「すんません、すぐ片付けますから」

隣近所中に頭を下げ回った後、荷物を店の中に運び入れる仕事が始まる訳。運送店が重いもんで放り出しただけに、ちょっとやそっとで動くものでない。ただむやみやたらに力んでも何んにもならんのや。内の人からは、

「持ち慣れると自然にコツが分ってくるもんや」

「せいたことせんでも、そのうちに商売と同んなじように慣れて来るさかい」と、慰められるれど、やっぱし悔しい思いは残る。早う誰にも言われんようにならならんと。私ゃ、紙屋のオカッツァンなさかい。あの合羽屋のオカッツァンにも負けてたまるかい。

重い紙の荷物を片付けながら、暗がりの中で自然に落ちた紙くずがないかと手探りで地面をなで回すようにして掃除したもんや。なにしろ、紙くずが溝に

入ってしまうと、詰まるからと近所から苦情を言われたくなかったし。人様から文句を言われるっちゅうことは、私に手抜かりがあったと言うことやから。そんなことで、つけ入られてたまるかいね。何んしろ、こっちは信用が第一の商売やさかい、爪の垢ほどのことでも気をつけんといけなかった。私が内の人に出来ることは、せめてそんなことやったけど。

やるだけのことをやっていると、何んでか知らんけど笑顔が出てくるもんなんやね。体はエライ(大変な)思いをしていて、あっちこっちギシギシ言うほどなのに不思議なもんや。“一所懸命”に頑張っていることの、お天道さまからのご褒美なんかしら。

昼間は人様へのご奉仕、夜なべこそ本当の仕事

紙ちゅうものは、端(はた)から見ていた以上に扱い難いものや。娘時代の紙というたら、お茶を飲む時の半紙とか、筆書きをする時の書道紙くらいしか思い浮かばんかったけど。何んでも、端から見ているのと実際に自分がしてみるのとでは大違い。まして、それで食べて行こうとしたら遊び半分で物事が勤まる訳がない。

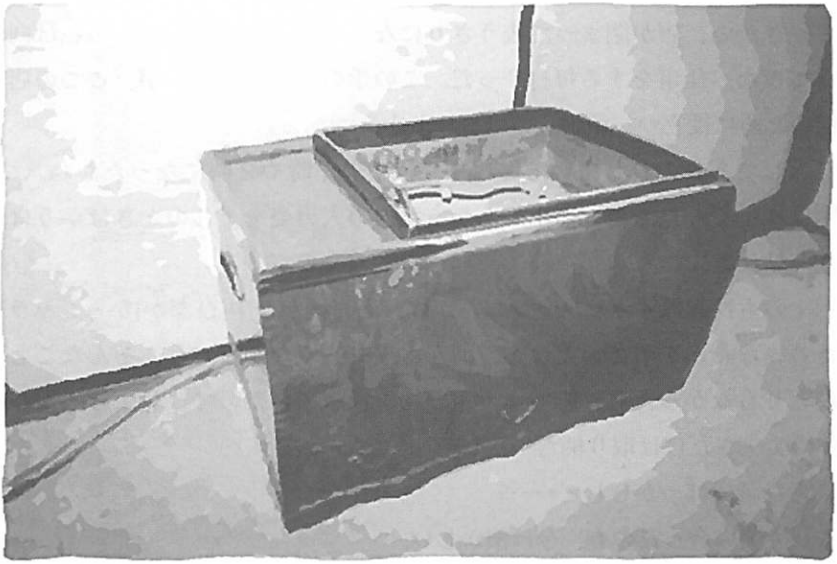
「あれもこれも揃って、待遇も良くなきゃ何も出来ない」

物があり余っている今だからこそ、若い人はそんな好き勝手のようなことを言えるけど、あの頃は違うとった。体を動かして、汗を流して、足りないものは工夫して遣り繰りしてた。

一番苦労したのは、紙の枚数を読むことやった。５００枚の束を５枚ずつ読むんやけど、内の人のような手さばきはとっても出来んかった。手先を見ていると、まるで魔法のように紙が扇のように広がり、５枚ずつ自然に指先に集まってくるよう。

私がすると、もう紙は固まるかバラバラになるかのどっちかで、５枚ずつのつもりが、３枚になったり６枚になったり、何回しても枚数が数えられん有り様。モタモタとしていると、新しい紙やさかい、スーッと手先が切れてしまい、生傷ばかりが増える始末やし。

そんなモタモタした私を見ていても、内の人はむやみに怒らず、辛抱強く手慣れて来るのを待っていてくれた。自分は修行して紙に関しては玄人でも、女房は素人、いつかは上手くなるやろうと思うたんかね。黙って何も言わんかったのが、かえって嬉しくてすぐ目頭が熱くなってしもうて‥‥。



やっぱ、苦労するのはいいもんや、買うてでもするものや。苦労で叩き上げた上で、自分のしたいことをする時の気持ちの良さったら、一言でいえるもんやない。

「紙は薄いもんやから利益も薄い、けど温かいこころで商いすれば、いつか利益も厚くなる」

実際、昼間の仕事は人様へのご奉仕のように利幅のないもんやった。それはそれで、人様の便利さをお世話するのが商いの源(みなもと)やから、何もいうもんではないし。もしかしたら、いつか世の中からお世話した分のお返しがある

かも知れんけど、そんな見返りを当てにしてするもんではなし。損得勘定ばかり先にしてたら、お天道様から罰が当たる。

つまらんことを当てにするより、今ここで“一所懸命”に頑張るのが一番。人様が遊んだり、寝ていたりする時に仕事することが、店を大きくして行くための儲けに繋がる。店を大きくすれば、人様に今まで以上に便利にお世話してあげられるし。

そやさかい、店が閉まって夜うさりになると、決まって内の人と私は向かい合うて夜なべ仕事をする毎日やった。この手の動き一つ一つが、ここの店とお客様のために役立つ。頑張らいでおれようか。

二人してあれこれしていると、すぐ夜中の１時や２時になったかね。でも、昼間はゆっくり見ることの出来んかった内の人の姿を、このときばかりはじっくりと見れるし。

近くの古物商のオカッツァンなんかは、商売柄か日中(ひなか)からシャランとした着物なんかを着ていたけど、何んも羨ましくなかったし、そんなことを構うゆとりもなかったわ。紙ちゅう重い物を扱っていたので、見栄ばっかしよりも体の丈夫さだけは取り柄だったし。

「こんな苦労ばっかしして‥‥」

二人して笑い合ったのも、今は懐かしい。

浅野川大橋で莫蓙を敷いて夕涼み

珍しく、夕方に暇が出来たりすると、内の人はすぐ電柱の明かりの下で将棋を始める。何、相手なんか探さんでも、物好きな近所の人が寄って来て、やじ馬まで集まって来る。暑い夏の時なんかは、

「蚊が寄って来るから煽げ」

なんて、人前で恰好良く見せるんや。男の人って‥‥。

そんでも尚暑いと、向山(卯辰山)にある愛宕山(今の観音院のこと)へお参りに連れて行ってもろたね。浅野川大橋の付近にいろんな夜店があって、娘ごころの抜けない私には、何かこころが浮き浮きする思いやった。柳の木の下で書生

っぽい人がバイオリンで何かの曲を鳴らしたりしていると、つい立ち止まってしまったり。しばらく聞きほれていると、「おい、もう行くぞ、いいかげんにせんかい」と、内の人にこずかれて仕方なく付いて行ったりしたことがあったっけ。

人混みを避けて河岸に降りると、さすがに夏の暑さも一段落。持って来た莫蓙を敷いて夕涼みをすると、毎日の忙しさが嘘のよう。ほ〜っと一息ついて座っていると、さっき夜店で、内の人が美味しそうやというので買った桃を一人で食べ出す。私にはいろんなことを文句いうのに、自分は家へ帰るまでに皮も剥かんと食べ出す始末。何やいね、自分だけ好きなこと言うて。

やっと蒸し暑い家に帰って桃を切ってみると、傷もんで安く売っていただけあって、中から蛆が出て来てびっくり。そんでも負け惜しみの強い人や、

「ほら、蛆が食べるほどに美味しい桃やぞ」
と、言うのや。あきれてものも言えん。

ま、そんでも近所の合羽屋のオカッツァンなんか、せっかく買うたものは何もかも食べんとオトマシイ(もったいない)言うて、西瓜の種も一緒に口に入れてしまう位やさかい。お金を貯めて行くちゅうのは、そんだけせなならんのやろね。

せやけど感心するのは、この辺の商売人はただ貯めるだけやない。あのオカツァンなんか、儲けたお金は人様のために使うてこそ生きるというて、観音院の石段を直すのに寄付したり、何んやら窪の九万坊さんの坂道にも同んなじことをしたとか。そうして自分は、贅沢な服も着んと、特別美味しい物も食べとらんというし。

私らも、ただお金を儲けるだけやのうて、人様のためになるようにせなならん

と思うて、励みにさしてもろうたわ。

軍隊へ行った内の人の留守を守って

ここのお店を守ってくれる氏神さんは、豊国神社だったそうやけど、私が生まれる頃には卯辰山へ移ってしもうていた。そやさかい、お参りは加賀一の宮の白山比⇒神社へ毎月一日に欠かさずに通うたわ。今でも白山比⇒神社の総代さんは、一日参りをしていて、タイムカードみたいなもんに出欠を記録しとるんやて。

ひんやりする拝殿の中に入って、大太鼓に続いて祝詞、お神楽、お払いをしてもらいながら、店の繁盛、店の子の健康、子供たちの幸せ、そうして何よりも内の人が無事に戦地より帰って来ますようにと願うとった。軍隊によっぽど重宝されとるのか、今の戦争が始まる一年前から兵隊に行ったまま、六年も七年も帰って来んかったのやし。その間に、ソロモン諸島からラバウルと回り、オーストラリアの捕虜となってマラリヤで高熱を出したりしたりして。長い間待たされた。今思うと、あの高熱が原因で帰国してから亡くなったのかしら。

そんな留守中の私の心配を他所に、内の人の話を聞いてみると、結構特別待遇やったみたい。何しろ、ここの店の看板も自分で書くほどに筆達者なもんで、もっぱら司令部で重宝がられてずっと事務の仕事をしとったとか。

何せ、私の手紙も内の人が上手な筆文字で書いてくれていたんやさかい、さもありなんかね。

算盤も早かったので尚更のこと。芸は身を助けるというけど、内の人の場合は芸がありすぎて、ずっと軍隊に引き留められていたんと違うやろか。私にいわせれば、ありがた迷惑といったところや。さしずめ、芸が身を助けすぎて、かえって我が身を縛りつけられたみたいなもんや。お蔭で、最後の最後まで司令部付きになっとって、他の人のようにさっさと帰してもらえんかったのは困らされた。

ただそうはいうても、直に命に関わる所におらんかって生き残ったのが、せめてもの慰め。戦死してしもうたら、元も子もなかったのやさかい。感謝せな

ならん。と、殊勝な気持ちになりかかったら、内の人の言いぐさが何んやいね。よくよく聞いてみると、公文書だけでなく、隊長さんの私用の手紙の代筆もさせられとったようで、中には女の私には言えんようなものもあったらしい。そりゃ、なかなか返してもらえんのも分るけど、何もそこまでせんでもいいのに。男の人って‥‥何やら腹立たしゅうなってくる。

もともとが大柄で、最初に奉公していた紙屋で独立する時も、倉庫の用心棒代わりをさせられた程の人。そやさかい、軍隊に入ってもそこらへんの将校よりずっと体格も立派で貫禄があったのやろ。髭を生やしていると、もう傍目には階級がずっと上に見えて、どっちが大将か分らなかったみたい。新兵さんなんか、黙っていると大将と間違えて敬礼されたとか。それをまた、内の人ったら調子に乗ってしもうて

「きおつけ〜、ふむ、ご苦労」

なんて適当なことを言うさかい、尚更に皆んな訳が分らんようになっとったんやと思う。

加賀鳶に縁のあった息子

時代劇なんかで威勢の良い江戸の火消しが出てくるけど、あれは前田のお殿さまの加賀鳶衆が見本になってるって聞いたことがある。そりゃ将軍様にはなっとらんけど、長続きせん力で意気込むよりもっと大事なものでは、徳川家以上やったと思う。こんなに華やかで味わいのある金沢の町も、前田のお殿さまやったから出来たことやろうし。職人やら、作家やら、芸人やらの、こんなに多い所は他にないはずや。

やっぱり加賀鳶衆がおったからこそ、江戸の火消しがいいのになったのに違いない。息子が金沢独特の自治消防の浅野川分団に入ってくれと言われた時も、賛成こそすれ、反対するいわれはなかったし。それに、商売人は人のお世話をして役に立つことが一等大事なことやさかい。ただ、

「一旦始めたら最後まで続ける甲斐性がなかったら何もせんほうがいい！」

とだけ、釘は刺しておいたけど。

浅野川大橋のたもとにある火の見櫓にしたって、「金沢の三櫓」といわれて犀川大橋と堤町の櫓に並ぶものやとか。何でもその昔、明治の始めの頃(明治２年６月)に、江戸・東京から加賀鳶衆が約３０人、金沢に呼び寄せられた折に作ったそうな。今在るのは、去年の４月に金沢市で再現したミニチュア版やそうやけど、大事な歴史の道しるべを残してくれるのはありがたいこと。

私も勉強になったけど、火の見櫓のてっぺんに付いている半鐘は昔からのもんやと思うとったけど、あれは明治からこっちのものなんやて。江戸時代は、太鼓をドンッドンッと叩いていたとか。テレビの時代劇では半鐘の方が火事らしさを出しているのでつかっているとかで、あやうく騙されるとこやった。

ここら辺のことは、消防歴２０年以上になる息子からの受け売りやけど。

そんな由緒ある浅野川分団に入った最初の頃は、夜討ち朝駆けの消防作業やら、寄り合いで飲む大酒に、端から見ていて可哀想な気がしていたのも束の間。

骨酒(こつざけ)の廻し飲みも堂々としたものらしく、興がのると勇ましくまず謡の一節を

「飲ォ～めェ～ば～甘露もォかくゥやらんとォ～」

とやり出したり‥‥。

ほんとに、これも家中で謡を稽古してもらってるからこそ、ちょっとは仲間内で格好良く出来るんだから。

それに、酔っ払って家に帰って来るときなんかは

「加賀の鳶だよ　百万石の

まとい振っては　火柱こえて

男だてだよ　命をかけて」エンヤラヤ

サノーヨイサヨイヤナ、エンヤラ　ヤレコノセー

サノセーハレワサ　エンヤラワー

「ゑりにゃ加賀鳶　出初めの時は
勇はだかに　梯子を立てて
夢の枕や　あら吹き流し」　エンヤラヤ
サノーヨイサヨイヤナ、エンヤラ　ヤレコノセー
サノセーハレワサ　エンヤラワー
「加賀の華だよ　知らせの半鐘
ジャンジャンジャンと鳴りゃ　まといを持ちて
梯子、鳶口、気合いをそろえ」エンヤラヤ
サノーヨイサヨイヤナ、エンヤラ　ヤレコノセー
サノセーハレワサ　エンヤラワー

もう、“加賀鳶木遣り”唄をいつまで唄ってるんかしら。
夜も遅いし、近所迷惑にならなけりゃいいけど。けど、ひいき目に見ても、

確かにみるみる逞しゅうなるし、何より人様のお世話をすることの大切さを覚えてくれたみたい。孫たちの前で、「自分のことばっか言う前に、何を人様にしてあげれるかが大事なんやぞ」と喋る姿に、横から見ていて可笑しくなる。いつの間にやら、内の人みたいになって。

この商売を続けさせてもろうとる喜び

思うてみたら“紙”というもんは私らの生活に欠かせんがやね。たいそうな言葉にしたら、今の金沢の町や日本の国というか、もっと大きくこの地面の上にある国全部にしたって“紙”があったからこそ、こんなに便利になって来たんや。

いろんなことを書いて知らせたり、大事なものを包んでみたりして来れたのも、紙様(神様？)のお蔭。そりゃ勿論、紙だけやない！これこそ人が生活するのに一番大事なものやというものは、食べるものやら、着るものやら、住むものやら‥‥といっぱい出てくる。実家が農家やったさかい、田圃で作るお米の大事さもよ～く分る。

けど、私は内の人と一緒に紙屋の商いをして来たんや。“紙”がどんなに役立って人様を喜ばせてあげれるかが、いうてみたら生き甲斐。他の商売屋に嫁いでいれば、またそこの考えになるんやろうけど。そういえば、尾張町の他の店のそれぞれのオカッツァンの顔を見ていても、皆んなそんな風にかすがい役になれることに生き甲斐を感じているんやろか、生き生きした顔をしとる。私も自分が関わっていることを通して、世の中のためになるように働くことが毎日の支えになっとるさかい。

「お蔭で、この間は無理いうたけどアンヤトサン(ありがとう)」

というお客さんの喜びの顔は、そのまま私の嬉しさになるし。普通に勤めていたら、会社を通してお客さんの様子が伝わるので、勘の鈍い私にはすぐ分らんかったやろう。やっぱし、いつも直(じか)にお客さんと顔を合わせとることが大事なんかね。

いよいよ孫も一昨年に修行から帰って来た。店は全部息子に任せてしもうて

あるし、楽しく生きるのが人生、生かさせてもらっているシャバに感謝する気持ちを忘れんようにせな。

商売させてもろうとることのありがたさを忘れたらいかん。どんなに世の中が変わっても、新しい商売が出て来ても、

お客様のお世話をさせてもらう気持ち

お蔭様でという感謝の気持ち

を忘れんようにしたい。

お客様への頭の下げ方が足らんかったら、頭を下げるんでのうて、オンドベ(お尻)を上げるようにすればいいのやさかい。

広沢みゆき・媼(おうな)について

明治四十四年六月四日生。昭和五年に畝田の農家より嫁ぎ、主人とともに新所帯の広沢紙店を築き上げる。途中、戦地へ行った主人の跡の店を切り盛りし、息子から孫へと商売を引き継ぐかすがい役となる。

あとがき

この小冊子のさし絵を描いてもらっていた副理事長の村上隆氏が、昨年夏に逝去されました。尾張町にとって、本当に大切なものを失ったという感じで残念でなりません。後に残った筆者としては、愛する尾張町のこのシリーズを、ライフワークとして続けられる限り、書き継いで行く思いを新たにしております。

幸いにも、２０号からは金沢市の助成金も付き、公にも少しずつ認めて下さる人が増えたことは嬉しさにつながります。乱暴な表現ですが、こころの畑を耕すのが文化であり、モノの畑を耕して便利さを求めるのが文明であるとされています。すれば、移り行き進歩する文明を片方で補完する意味でも、一貫して熟成されて行く“こころ”を表現することは忘れてならない事柄と申せましょう。

幸いにも、昨年の四月には同じく金沢市の補助で“尾張町老舗交流館”が開館し、「金沢“らしさ”」を尾張町より発信することが出来るようになりました。そして、この四月よりはインターネット上での“尾張町ホームページ”も整備されて発信される予定となっています。

『古き皮袋(連綿と続く尾張町商人のこころ粋)に新しい酒(インターネットを中心とした情報発信)を盛る』

ちょうど昨年の夏より、金沢大学が移転して空き家になっていた城跡に、県立二水高校が校舎を新築する間の仮校舎として２年間移転して来ました。生徒たちは、金沢城の裏門である石川門でなく、表門になる大手門、加賀藩士が実用に通った黒門から通学を始めています。特に大手門は、参勤交替や天皇家・徳川家が公式に通った門でした。また黒門は、一般の商人や町人が通ることのできる唯一の門であり、そのために坂もなだらかで城内に入り易い門となっていました。二水の若い生徒たちが、少しでもそうした金沢らしさの歴史的原点に気づいてくれることを願っています。

ともあれ、若者の賑わいも増える中で、どうか飽きることなく、このささやかな小冊子への、温かいご理解とご協力をこの場を借りてお願い申し上げます。

《さし絵の説明》

項　　目	内　　容
○表 紙	「尾張町の石柱」
<目 次>	
○親爺姑に近所小姑	「倉庫に積み重ねた紙の束」
○丈夫な店を探していたら、ご近所に	
能楽師が	「家の中の梁」
	「謡本が重ねて置いてある」
○道の真ん中に仕入れた紙の束を放り	
出したままに	「荷造りの器具」
○昼間は人様へのご奉仕、夜なべこそ	
本当の仕事	「大和風呂(四角い火鉢)」
○浅野川大橋で莫蓙を敷いて夕涼み	「観音院」
	「観音院の石段」
○加賀鳶に縁のあった息子	「火の見櫓」
	「浅野川消防分団のハッピ」
	「同　まとい」
○この商売を続けさせてもろうとる喜び	「倉の扉」
	「店の看板」
	「枯木橋」

発　行＝１９９７年３月吉日
著　者＝石野　琇一
さし絵＝石野　琇一
発行所＝金沢市尾張町１丁目１１番８号
尾張町商店街振興組合
尾張町若手会